京都外国語大学 2020 年度卒業生対象 卒業時アンケート集計結果

2021/05/31

総合企画室 IR グループ

1. 調査の概要

■ 調査対象

2020 年度の卒業生全員（9 月卒業は除く）

■ 調査期間と方法

2021.3.3～2021.3.31 の期間にて WEB 方式（メール配信及び QR コード記載の案内文配付）により調査を実施

■ 主な調査項目

- 入学時の志望順位
- 学修や大学生活等への満足度
- 大学に入学したことに対する満足度など
- 大学生活における成長の実感
- 成長のきっかけ
- 大学生活で身についた能力
- 外国語の修得
- 設備・環境の充実度
- 建学の精神の理解
- 卒業後の進路について

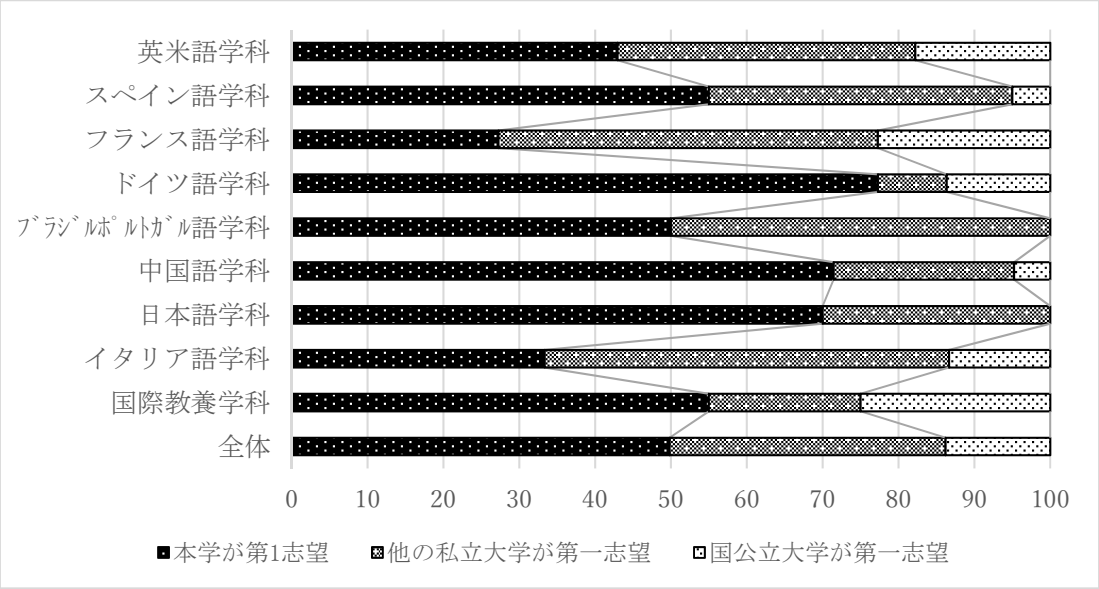
■ 回収状況

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、例年卒業式の際に実施していた質問紙調査形式を Web 調査に変更した。その結果、回収率が 6.48%と大幅に減少していたが、本年度は 31.1%から回答を得ることができた。高い回収率とは言えないが、各学科とも 30%前後の回収率であり、学科による偏りもないため、以下の分析・考察に耐えられると判断した。

学科	対象者数	回答者数	回答率
英米語学科	452	135	29.9%
スペイン語学科	59	20	33.9%
フランス語学科	53	22	41.5%
ドイツ語学科	64	22	34.4%
ブラジルポルトガル語学科	58	22	37.9%
中国語学科	69	21	30.4%
日本語学科	70	20	28.6%
イタリア語学科	56	15	26.8%
国際教養学科	75	20	26.7%
全体	956	297	31.1%

2. 入学時の本学の志望順位

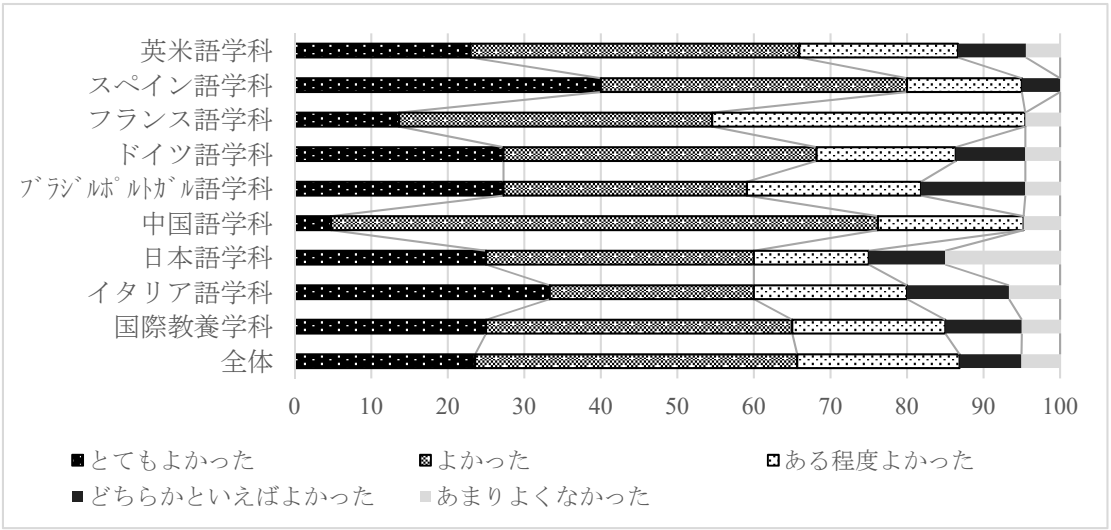
入学時の本学の志望順位をたずねた。全体でみれば、本学を第一志望として入学してきている者は約半数程度であることがわかる。入学時の志望順位については学科別に差がみられ（Cramer's V=.243, p=.004）、英米語学科およびフランス語学科において、本学を第一志望としていた学生の割合が少なく、ドイツ語学科および中国語学科において、本学を第一志望としていた学生の割合が多かった。



【図表 1】入学時の志望順位（横軸の数値の単位は%：以下同様）

3. 本学に入学したことに対する満足度など

本学に入学して「よかった」と思えたかどうかや「満足度」をたずねた質問である。京都外国語大学に入学してよかったかどうかをたずねる質問では、「とてもよかった」「よかった」というポジティブな回答が 65%を超えていることがわかる。学科別にみると、若干のばらつきはみられるものの、統計的に有意な差はみられず（Cramer's V=.156, p=.631）、一定数の学生が満足していることがうかがえる。

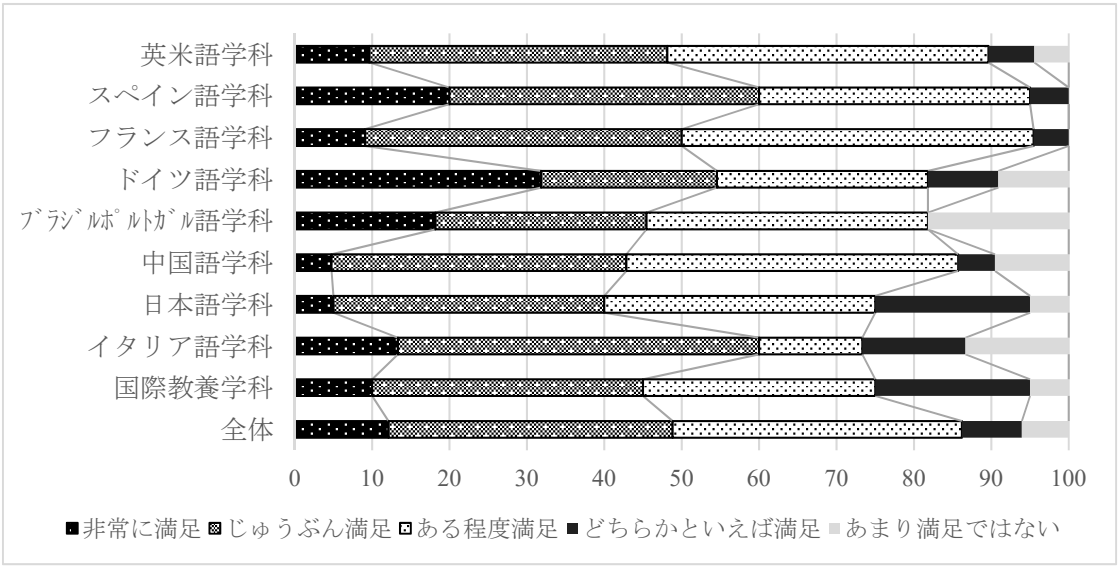


【図表 2】本学に入学してよかったか

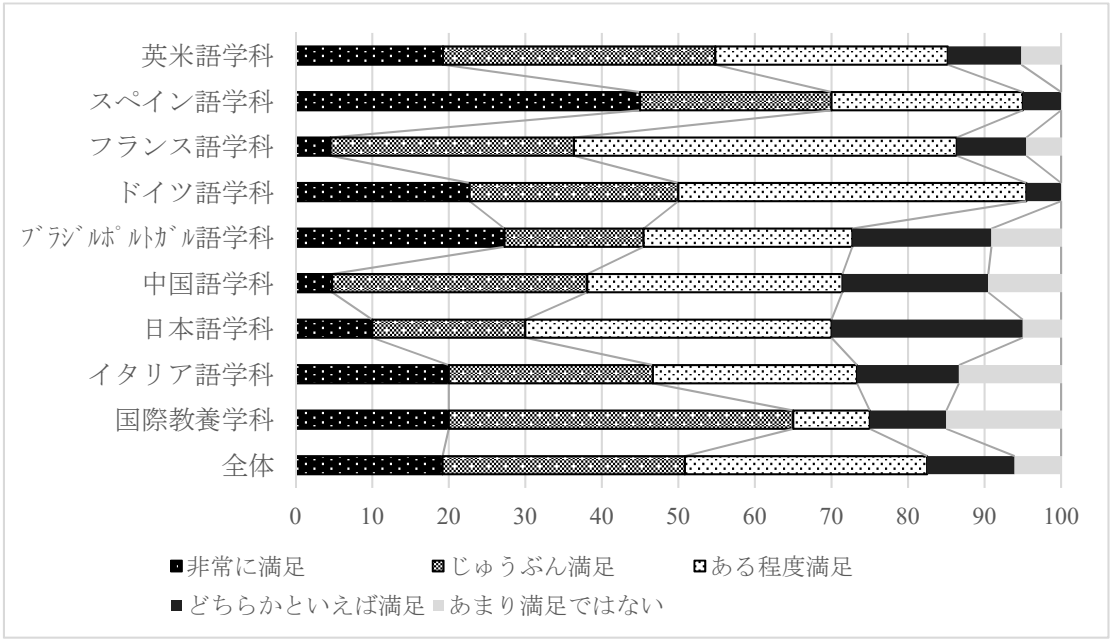
大学での教育や学修に対する満足度、および大学生活全体に対する満足度をたずねた質問では、水準の差はみられるものの、「非常に満足」「じゅうぶん満足」という回答が全体の 5 割程度を占めており、「ある程度満足」も含めると、全体の 85%が概ね満足しているようである。なお、学科別にみた際、有意な差はみられていない（Cramer's V=.184, p=.148）。

課外も含めた大学生活全体の満足感についても、ほぼ同様の傾向がみられ、「非常に満足」「じゅうぶん満足」という回答が全体の 5 割以上を占めており、「ある程度満足」も含めると、全体の 8 割以上が概ね満足しているようである。こちらも学科別にみた際、有意な差はみられていない（Cramer's V=.185, p=.144）。

これらの結果を踏まえれば、大学生活の充実には、勉学の充実のみならず課外の活動も含めた総合的な大学生活のあり方による影響が大きいといえる。教育内容の充実はもちろんであるが、それと併せてどのような大学生活を提供できるかが、大学としての課題だといえる。

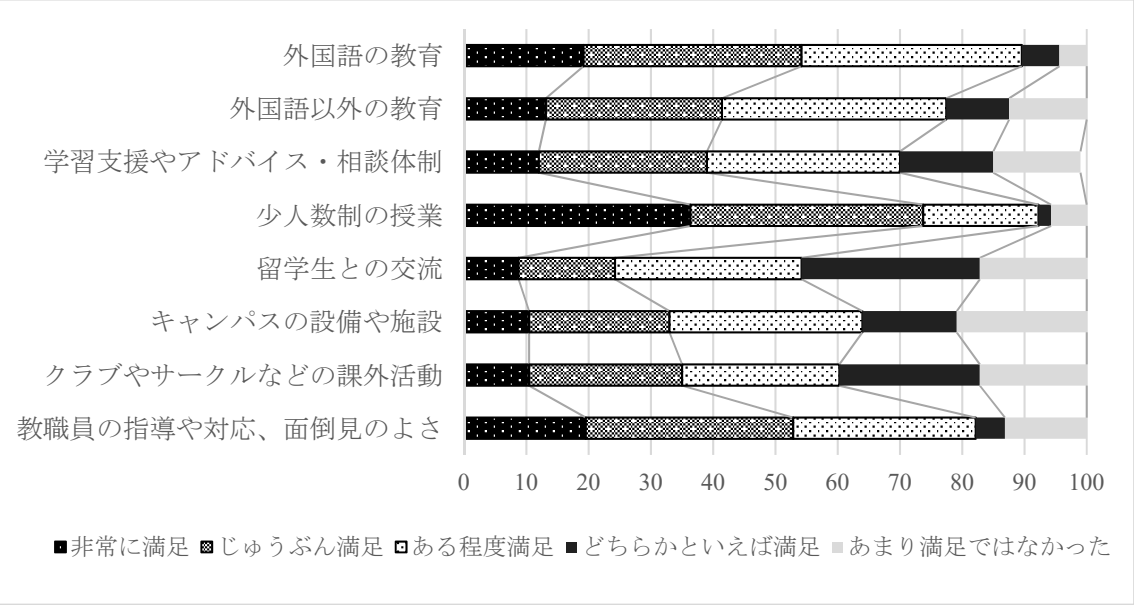


【図表 3】教育・学修に対する満足度



【図表 4】大学生活全体に対する満足度

大学生活における満足度を個別の項目に分けて詳細にたずねると、項目によって満足度に違いがみられるようである。総じていずれの項目に対しても一定以上の満足を感じているが、「外国語の教育」「少人数制の授業」や「教職員の指導や対応、面倒見のよさ」などの点に対する満足度が高いようである。これらは本学の教育の特徴であり、卒業生はその点に満足を感じているようである。他方で、「留学生との交流」や「キャンパスの設備や施設」などの満足度は相対的に低いようである。これらの点については過年度の調査でも同様の傾向がみられることから、引き続き改善に向けた検討が必要である。



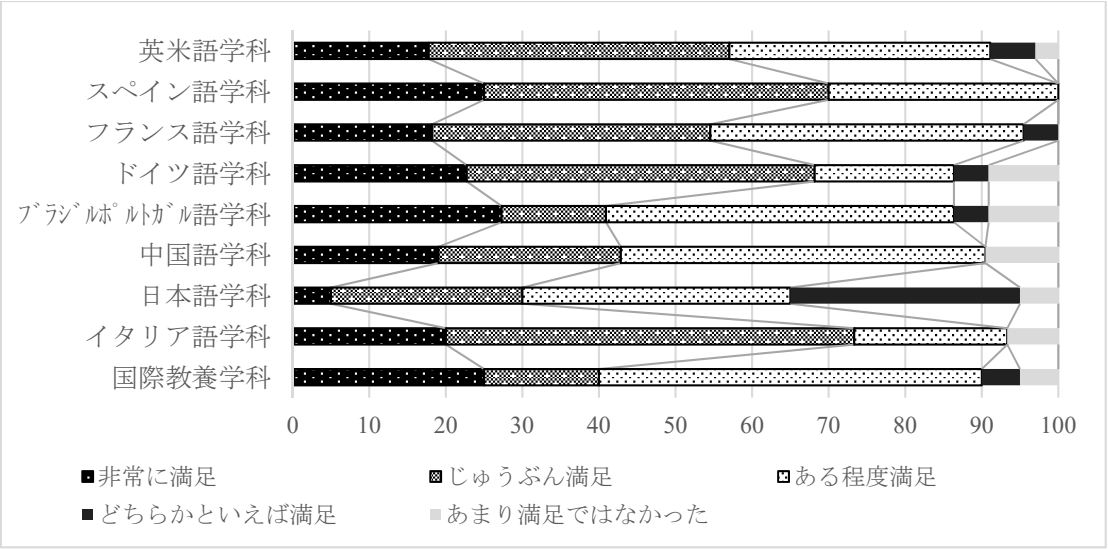
【図表 5】大学生活の各項目に対する満足度

それぞれの項目に対する満足度を学科別にみると、大きな差ではないがいくつかの項目で差がみられる。学科間の満足度の差は、学科の教育内容の特徴を示していると考えることができる。教育内容の特徴と学生の満足度が一致しているのかを、学科ごとに検証しておく必要があるだろう。

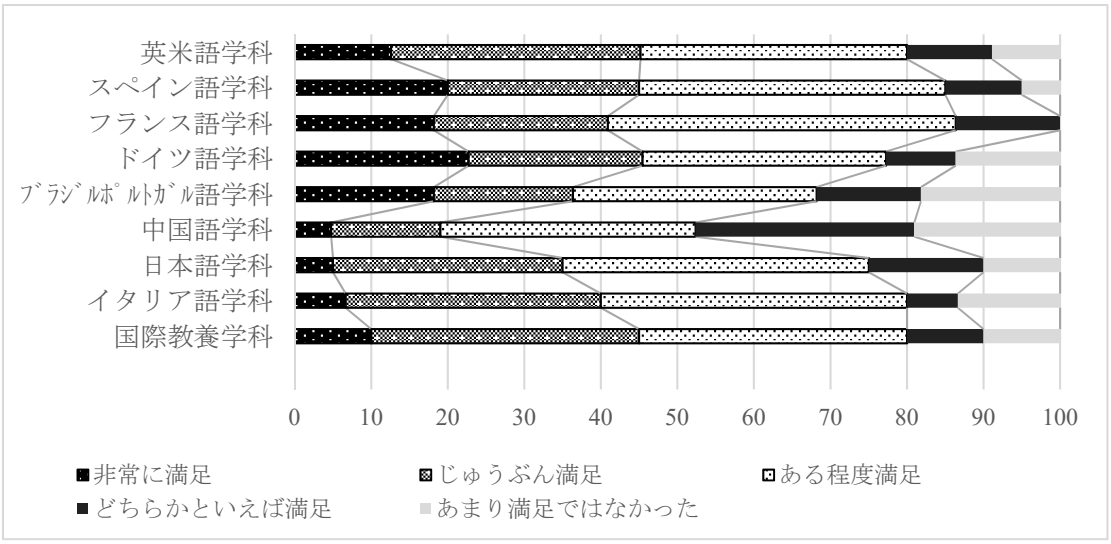
【図表 6】学科と各項目に対する満足度の連関

	Cramer's V
外国語の教育	.202*
外国語以外の教育	.140
学習支援やアドバイス・相談体制	.185
授業外のプログラムや行事	.115
少人数制の授業	.190†
留学生との交流	.182
キャンパスの設備や施設	.194†
クラブやサークルなどの課外活動	.183
教職員の指導や対応、面倒見のよさ	.193†

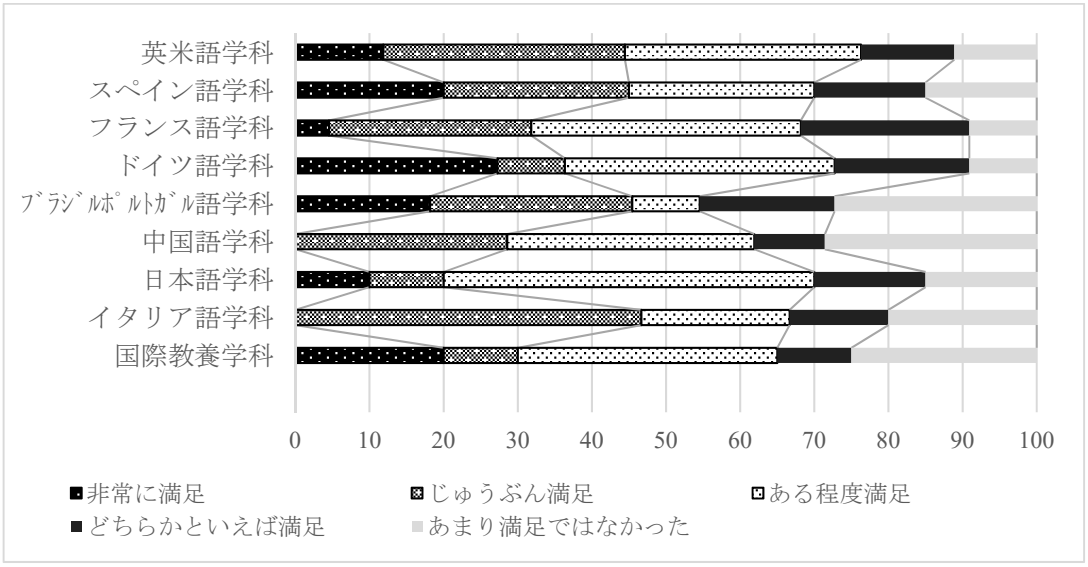
*p <.05, †p <.10.



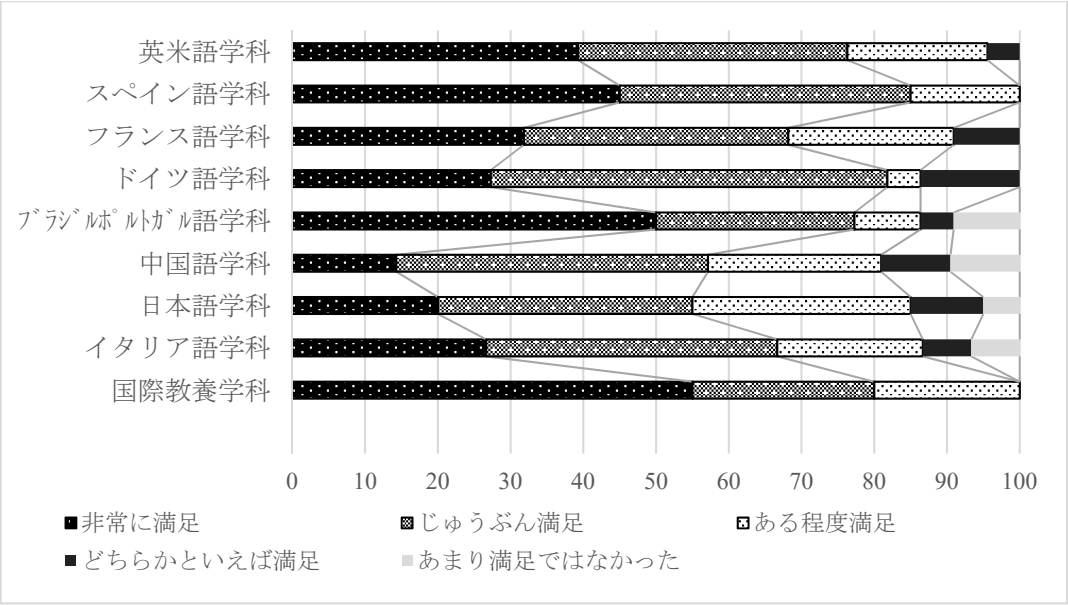
【図表 7】学科別の「外国語の教育」の満足



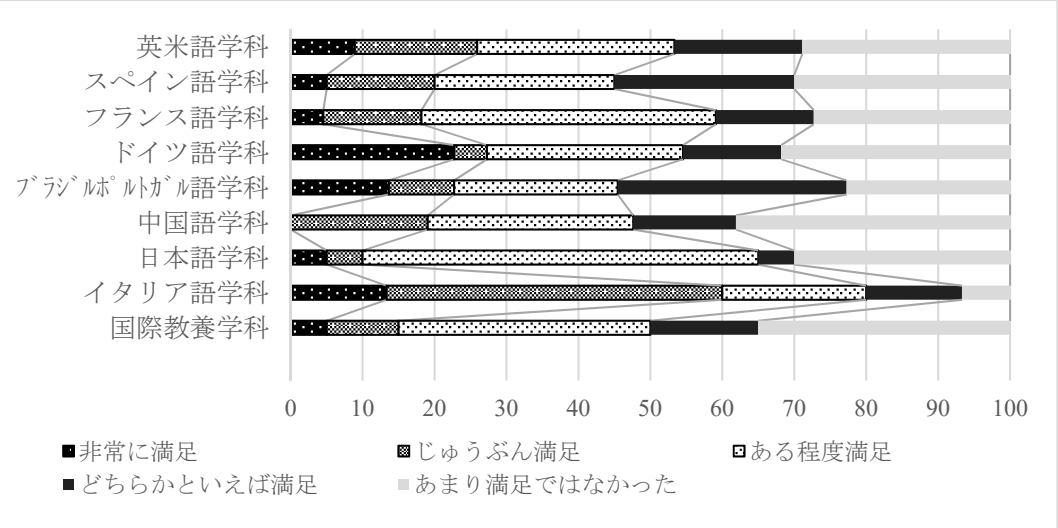
【図表 8】学科別の「外国語以外の教育」の満足



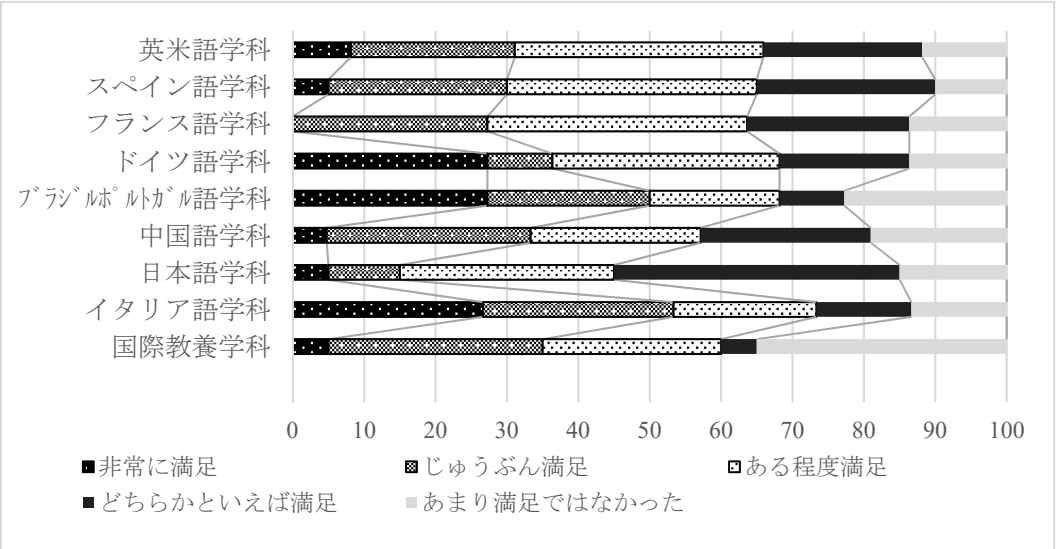
【図表 9】学科別の「学習支援やアドバイス・相談体制」の満足



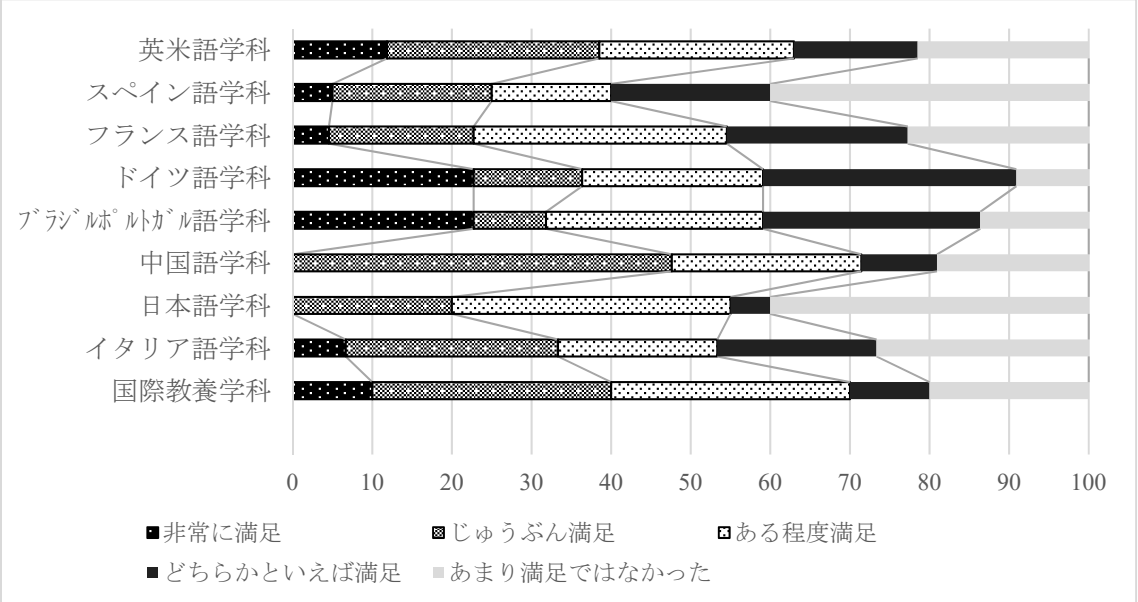
【図表 10】学科別の「少人数制の授業」の満足



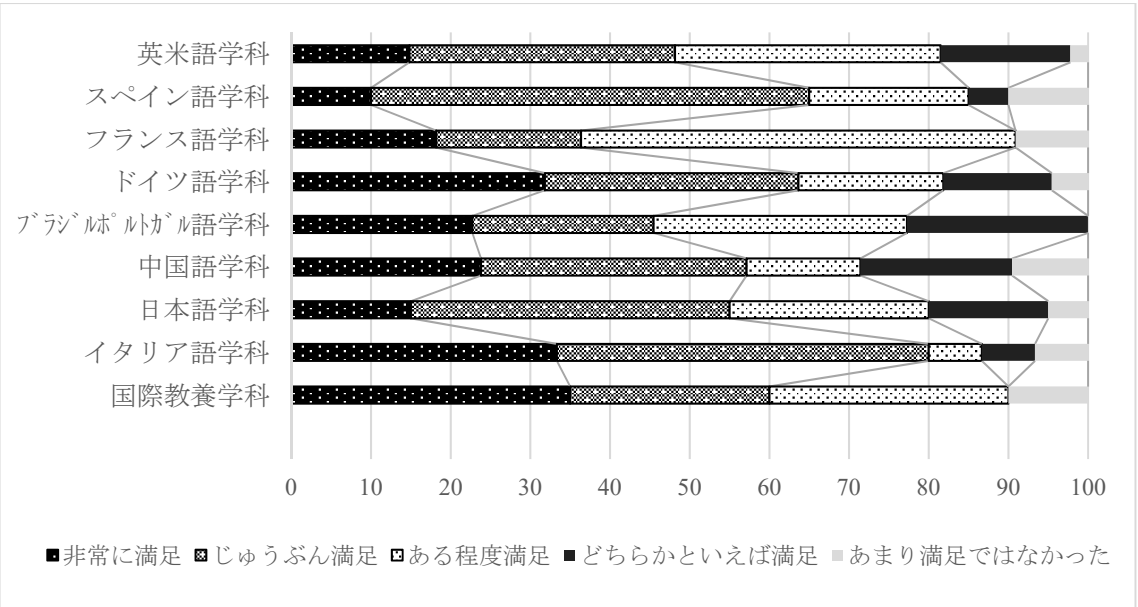
【図表 11】学科別の「留学生との交流」の満足



【図表 12】学科別の「キャンパスの設備や施設」の満足



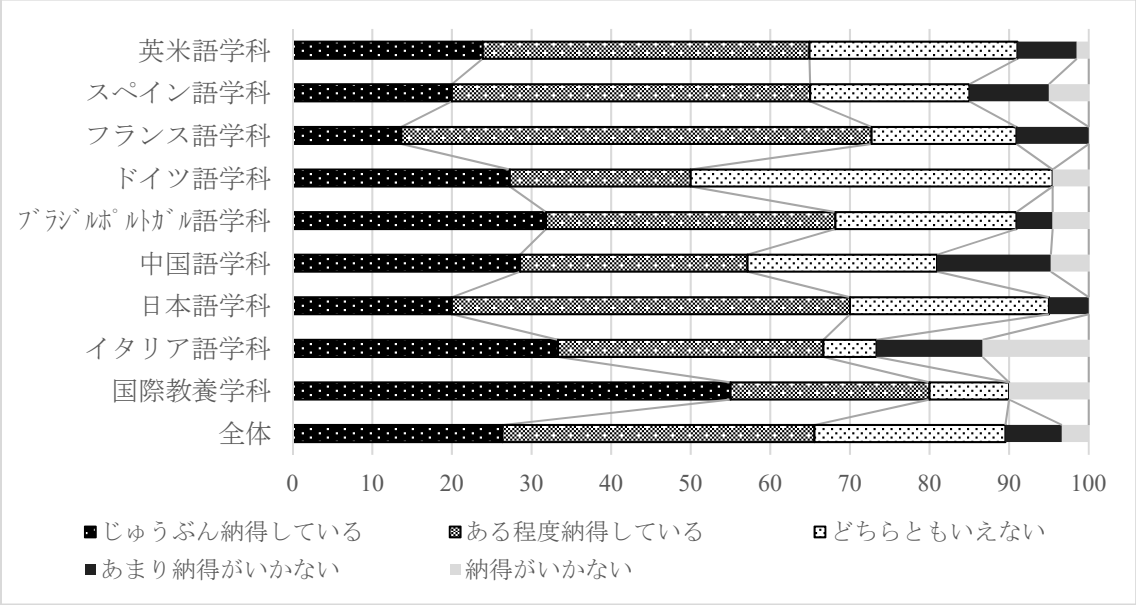
【図表 13】学科別の「クラブやサークルなどの課外活動」の満足



【図表 14】学科別の「教職員の指導や対応、面倒見のよさ」の満足

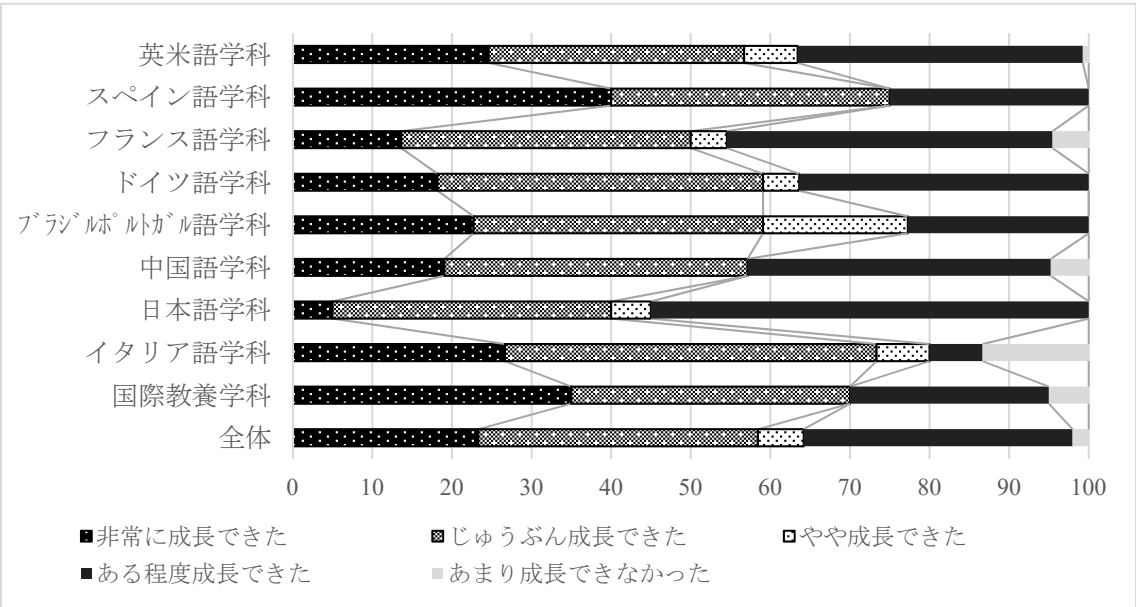
4. 大学生活における成長の実感

卒業後の進路や就職活動などのプロセスに対して自分自身でどれくらい納得できるものだったかをたずねると、全体的に「じゅうぶん納得している」「ある程度納得している」という回答が 65%程度であり，多くの学生は自らの進路選択に納得しているようである。学科別には特段の差はみられないようである（Cramer's V=.184, p=.149）。



【図表 15】進路やその決定プロセスに対する納得度

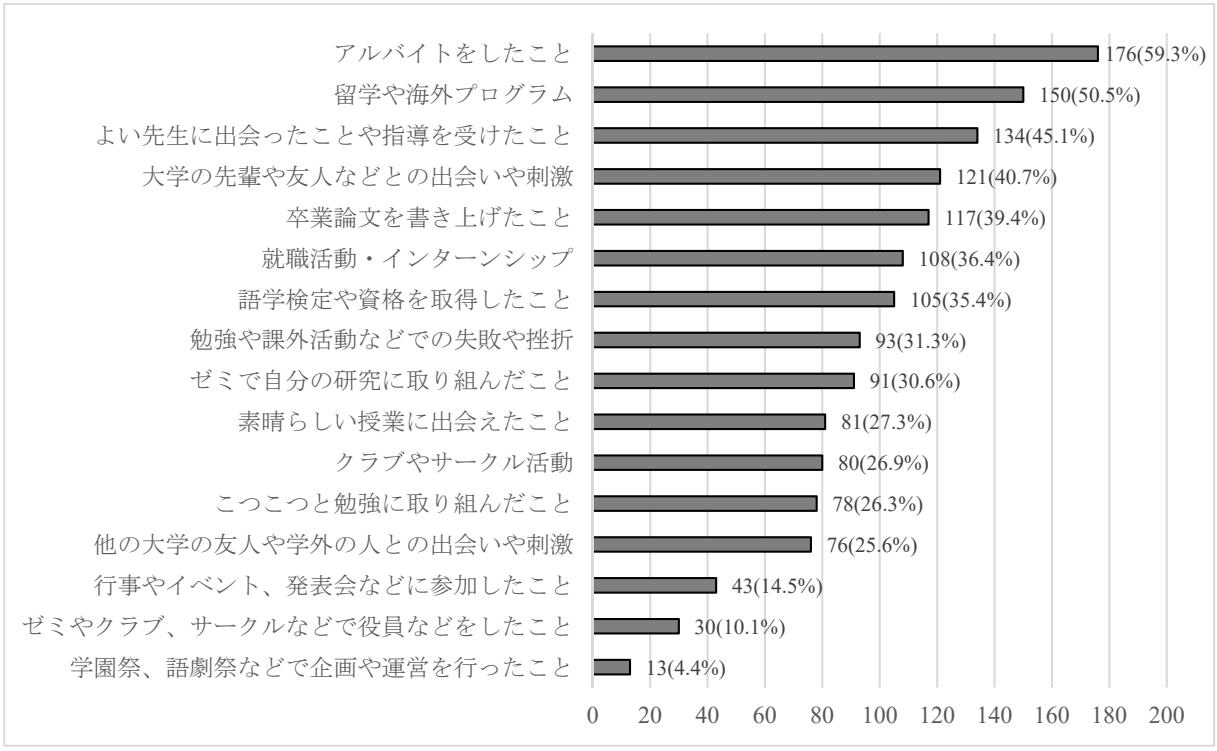
大学生活を通して自分がどのくらい成長できたかをたずねた結果を見ると、95%以上の学生が「ある程度」以上の成長を感じていることがわかる。大学生活における成長実感は、学科別には大きな差はみられない（Cramer's V=.188, p=.115）。



【図表 16】大学生活における成長実感

5. 成長のきっかけ

大学生活において成長のきっかけになった出来事をたずねたところ、最も多くの卒業生が言及するのは「アルバイト」であった。アルバイトは社会における実践的な経験であるため、成長を直接的に実感しやすいのだろう。アルバイトに次いで言及が多いのが「留学や海外プログラム」であり、実際に海外に行って学ぶことは、学生の成長を促すようである。また、「よい先生に出会ったことや指導を受けたこと」も多く選択されていたことから、大学において、教員は学生の成長を左右する重要な要因であることがうかがえる。これらの他には、「大学の先輩や友人などとの出会いや刺激」「卒業論文を書き上げたこと」などへの言及が比較的多いようである。



【図表 17】成長のきっかけとなった出来事（横軸は回答数）

成長のきっかけとなった出来事と、これまでに集計した「大学生活における成長実感」との関係を重回帰分析によって検討した。大学生活における成長実感を目的変数とし、成長のきっかけとなる出来事を説明変数としたモデルから、どのような契機が成長実感に影響するのかを分析した。今回のモデルは統計的に有意に目的変数を説明していたが、決定係数はそれほど大きくはなかった（R^2_{adj}=,086, p <.001）。

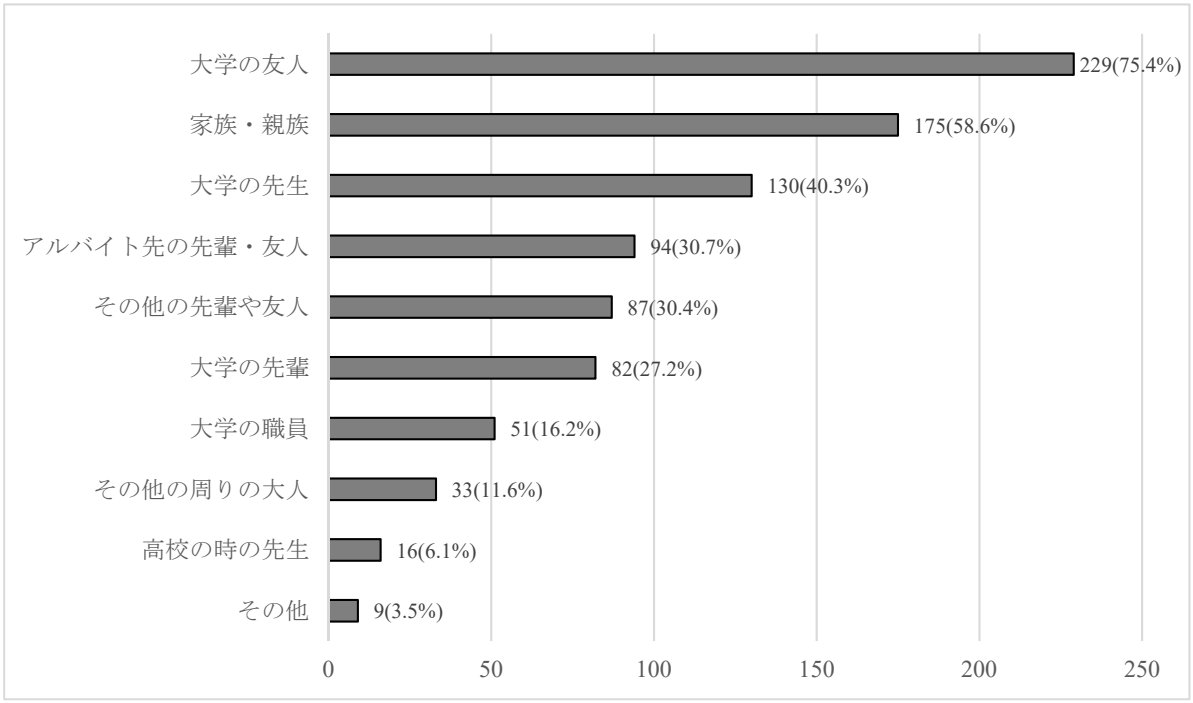
分析結果をみると、「こつこつと勉強に取り組んだこと」「素晴らしい授業に出会えたこと」「勉強や部活動などでの失敗や挫折」「よい先生に出会ったことや指導を受けたこと」「留学や海外プログラム」が、大学生活での成長実感につながっているようである。

【図表 18】学生の成長実感に対する成長契機の影響

出来事	偏回帰係数	
学園祭、語劇祭などで企画や運営を行ったこと	-0.275	
ゼミやクラブ、サークルなどで役員などをしたこと	-0.006	
行事やイベント、発表会などに参加したこと	0.100	
他の大学の友人や学外の人との出会いや刺激	-0.028	
クラブやサークル活動	0.289	
こつこつと勉強に取り組んだこと	0.288	†
ゼミで自分の研究に取り組んだこと	0.004	
素晴らしい授業に出会えたこと	0.309	†
勉強や課外活動などでの失敗や挫折	0.307	†
語学検定や資格を取得したこと	-0.197	
就職活動・インターンシップ	0.214	
卒業論文を書き上げたこと	-0.085	
大学の先輩や友人などとの出会いや刺激	0.062	
よい先生に出会ったことや指導を受けたこと	0.384	*
留学や海外プログラム	0.375	*
アルバイトをしたこと	0.005	

*p<.05, †p<.10.

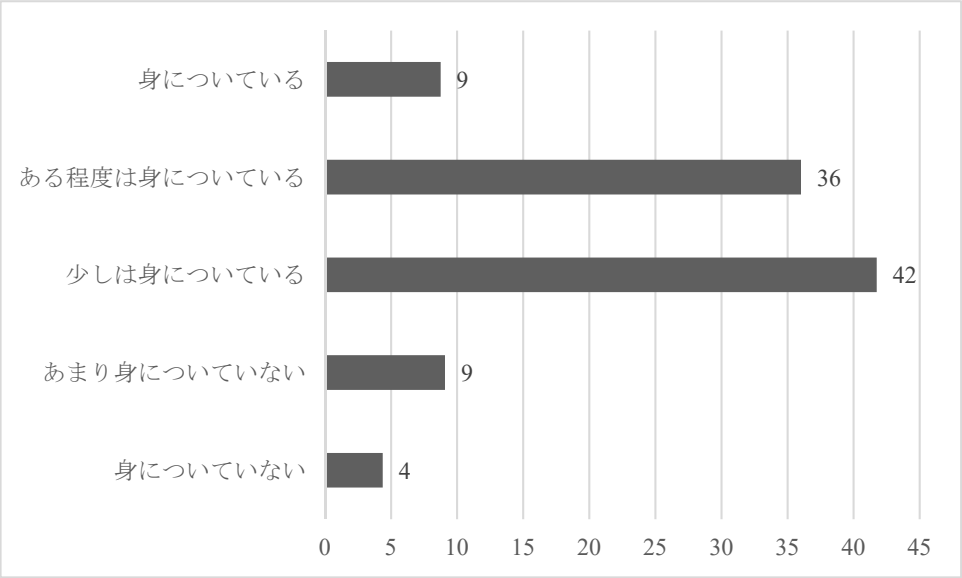
大学生活において、悩みや困ったときに相談する相手をたずねると、学生は友人や家族など身近な人に相談する場合が多いようである。次いで大学の教員、アルバイト先の先輩・友人などが挙げられており、この傾向は一昨年度と同様であった。



【図表 19】悩みや困ったときに相談した相手

6. 大学生活で身についた能力

卒業後に必要な能力が大学生活で身についたかをたずねると、中間の選択肢である「少しは身についている」という回答が最も多く、全体としては能力が身についたという回答が多い。この選択肢も含めると、全体の 86%ほどが必要な能力が身についたと評価していることになるが、4%近くの卒業生は「身についていない」と判断していた。こうした自己評価は進路に対する不安とも関連すると思われるため、今後の検討が必要であろう。

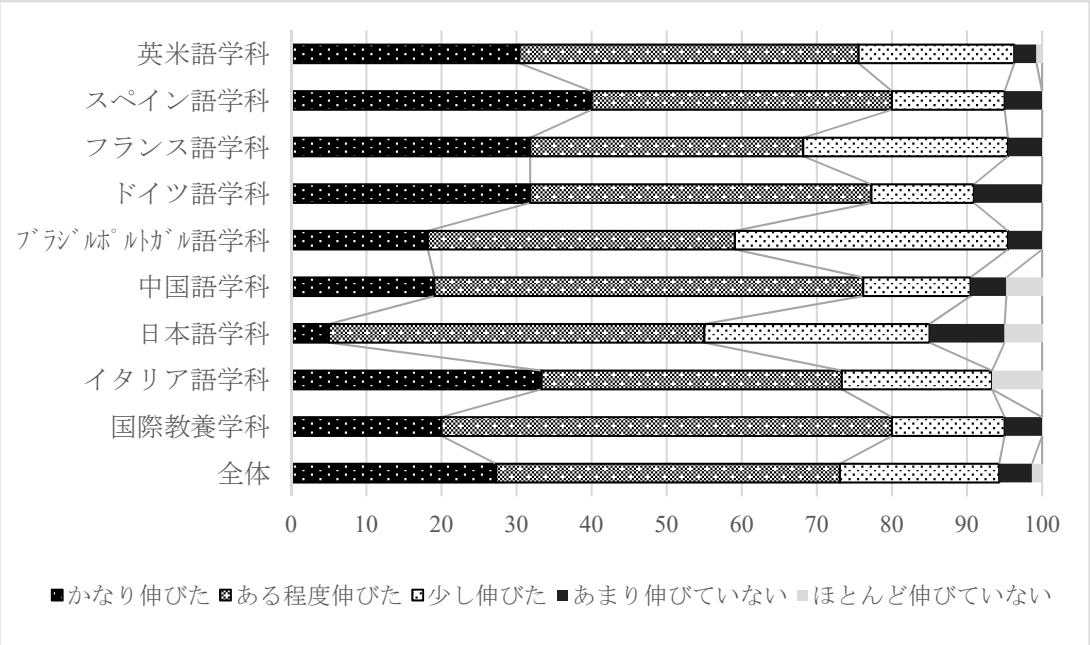


【図表 20】卒業後に必要な能力が大学で身についたか（横軸は%：以下同様）

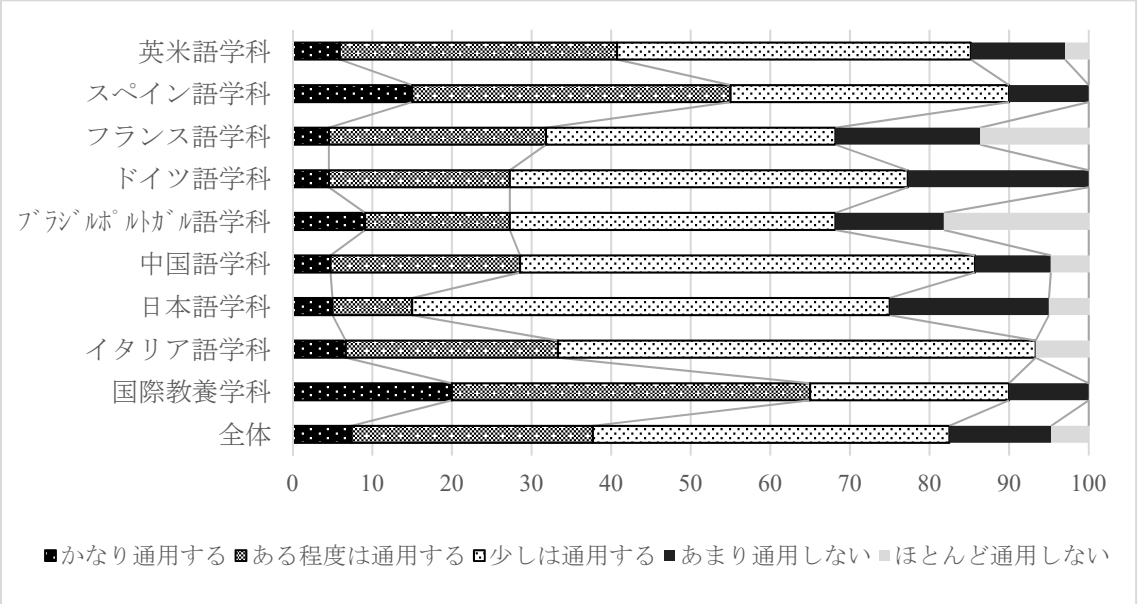
7. 外国語の修得

本学の教育の大きな柱である外国語の修得状況についてたずねた。全体としては「かなり伸びた」「ある程度伸びた」という回答が 7 割以上を占めており、「少し伸びた」まで含めると 95%に上る。したがって、それぞれの専攻する外国語については一定の水準で修得できているといえるだろう。

一方、現在の外国語の力が社会においてどの程度通用すると思うのかをたずねたところ、ある程度は通用すると考える学生は一定数いるものの、かなり通用すると思う学生は少数にとどまり、全体の 1 割に満たなかった。卒業生は外国語がある程度身についたと考えているものの、社会でじゅうぶん通用するほど修得できたと思えるほどの到達感は得られていないようである。



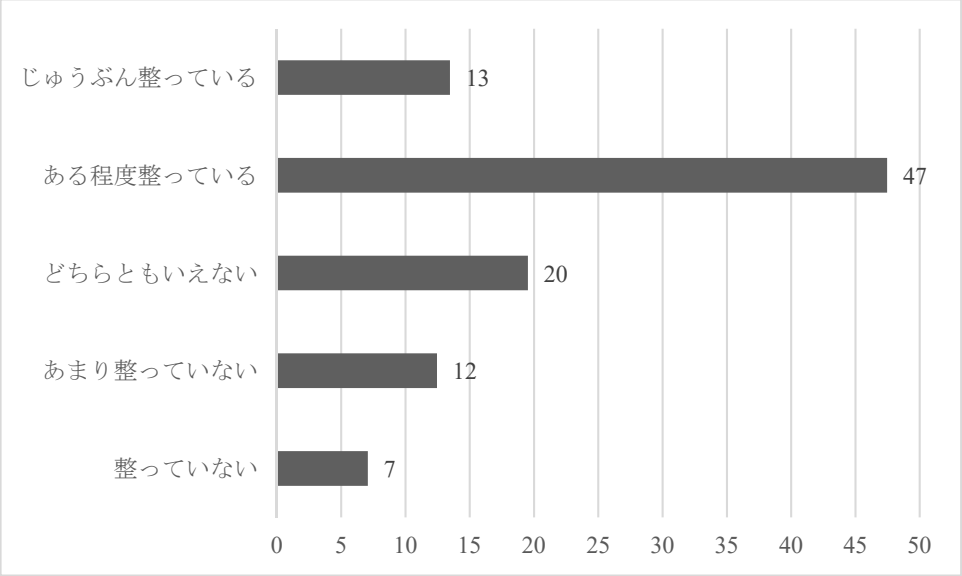
【図表 21】外国語の修得状況



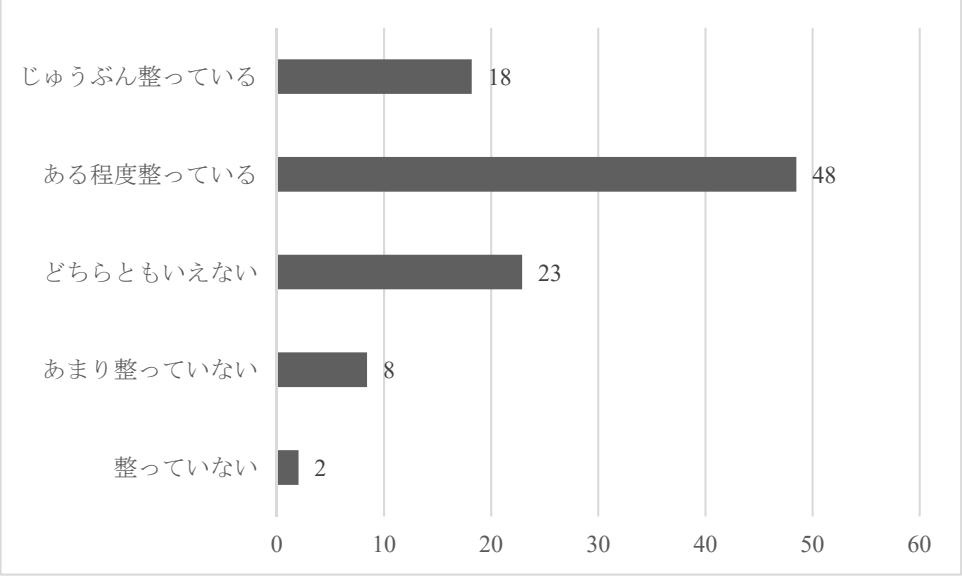
【図表 22】自分の外国語の力は社会で通用するか

8. 設備・環境の充実度

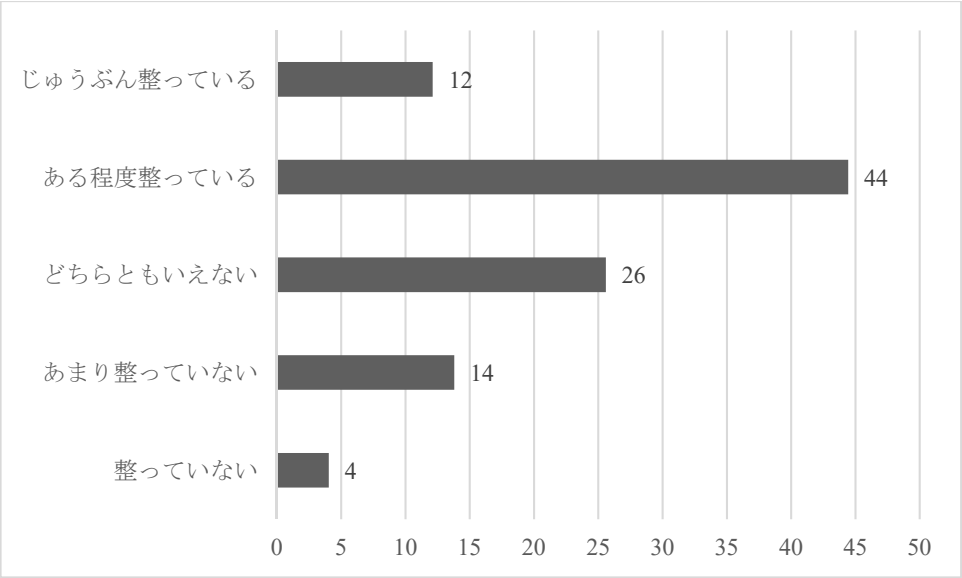
大学の設備や環境、研究支援やアドバイスの体制が整っているかなどについてたずねた。コンピュータや無線 LAN、図書館、グループ・個人で活動する場所、研究支援やアドバイスの体制など、いずれも「じゅうぶん整っている」「ある程度整っている」といった回答が 6 割程度を占めた。ただし、「あまり整っていない」「整っていない」という回答も 1 割ほどみられた。特に、コンピュータや無線 LAN などの情報環境やグループ・個人で活動する場所についてはこれらの回答が 2 割近くなっており、今後の検討が必要と思われる。



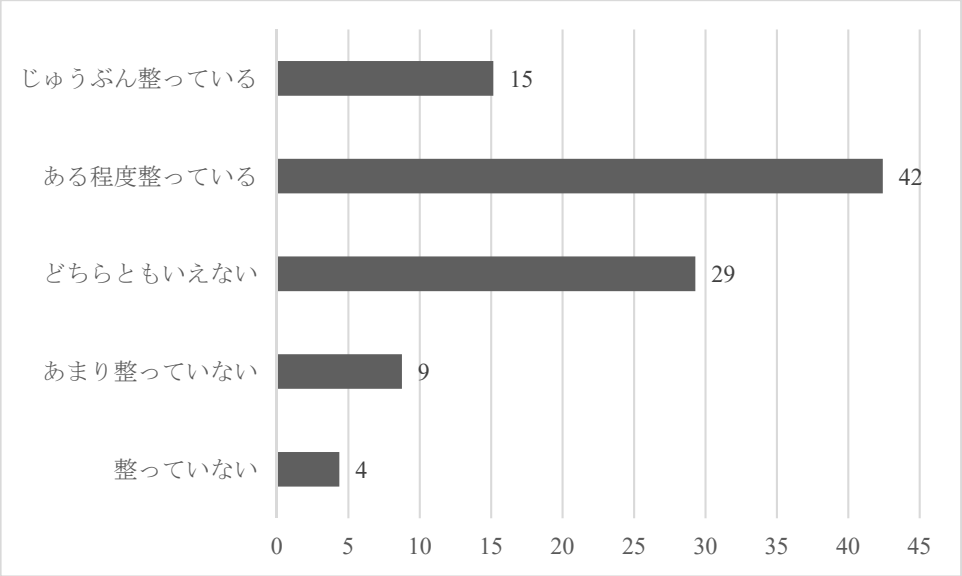
【図表 23】コンピュータや無線 LAN など情報環境



【図表 24】図書館



【図表 25】グループや個人で活動する場所

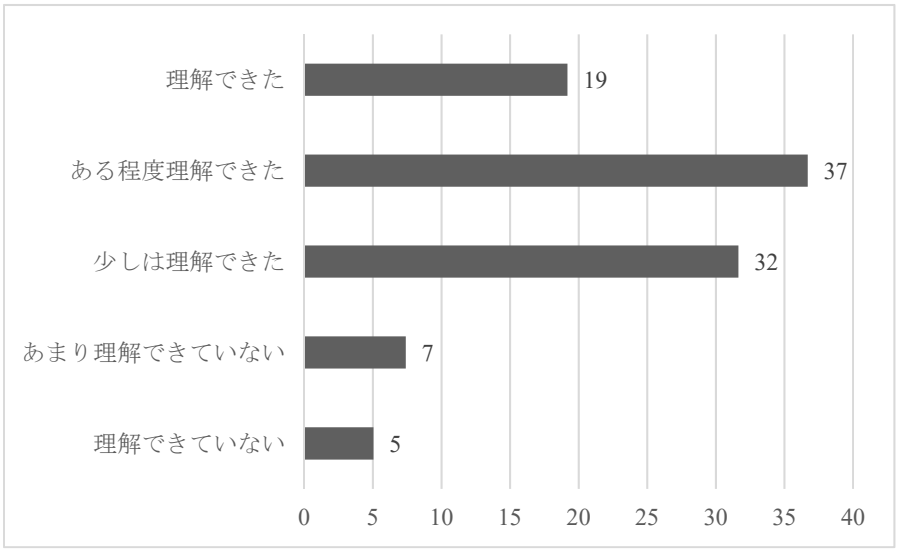


【図表 26】調査・研究の支援やアドバイスの体制

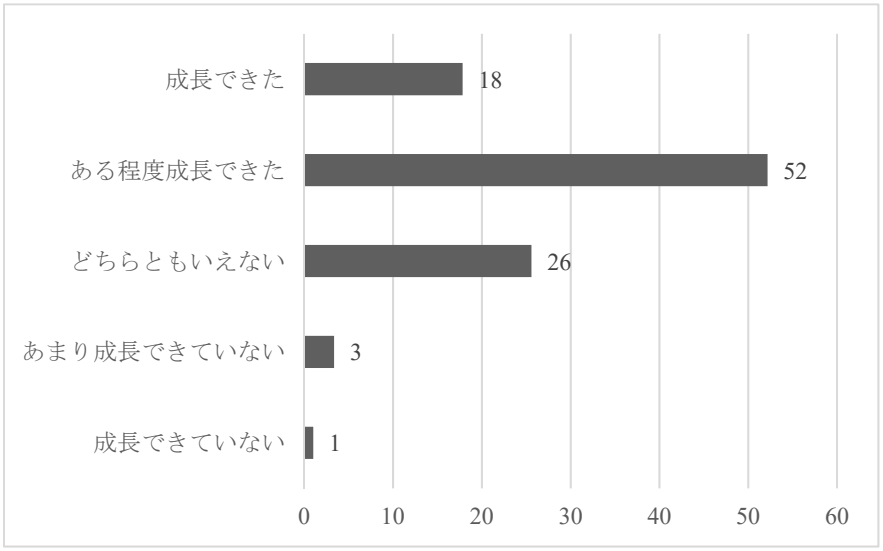
9. 建学の精神の理解

本学の教育理念に関して、大学教育を通して建学の精神が理解できたかどうかについてたずねた。建学の精神の理解については、多くの学生が理解できたと回答しており、一昨年度の調査時よりも「理解できた」「ある程度理解できた」と回答する学生の割合が増えている。特に、「ある程度理解できた」と「少しは理解できた」の割合が一昨年度と比して逆転しており、建学の精神について理解が深まっているといえる。

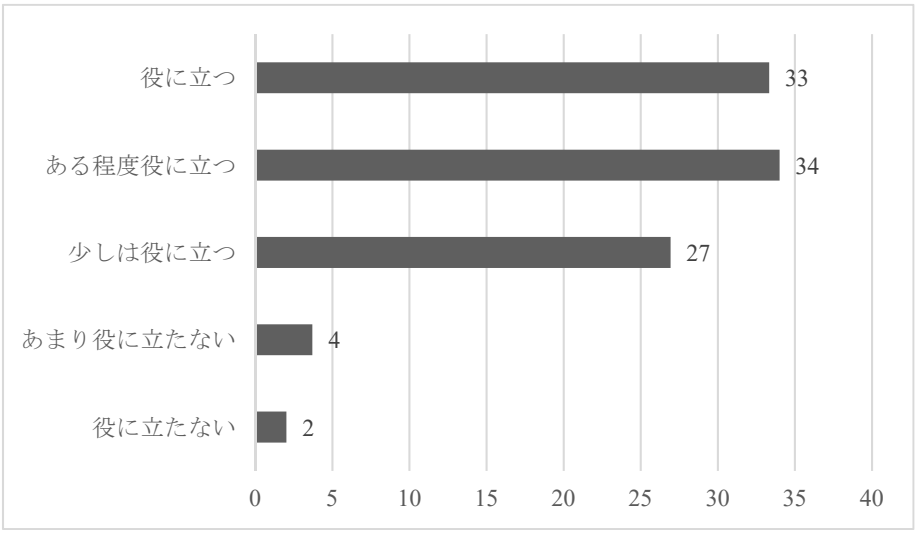
大学教育を通して社会に貢献できる人に成長できたかどうかをたずねると、多くの学生は成長できたと感じているようであるが、「どちらともいえない」という回答も比較的目立ち、一昨年度と同様の結果であった。また、大学生活での経験や身につけた知識・能力が、仕事や生活など今後の人生で役立つと思うかを尋ねたところ、「役に立つ」「ある程度役に立つ」という回答が 7 割程度であり、「少しは役に立つ」という回答も含めると 85%程度の卒業生が、大学で得た知識・能力が何らかの形で役に立つと実感できているようである。



【図表 27】建学の精神の理解



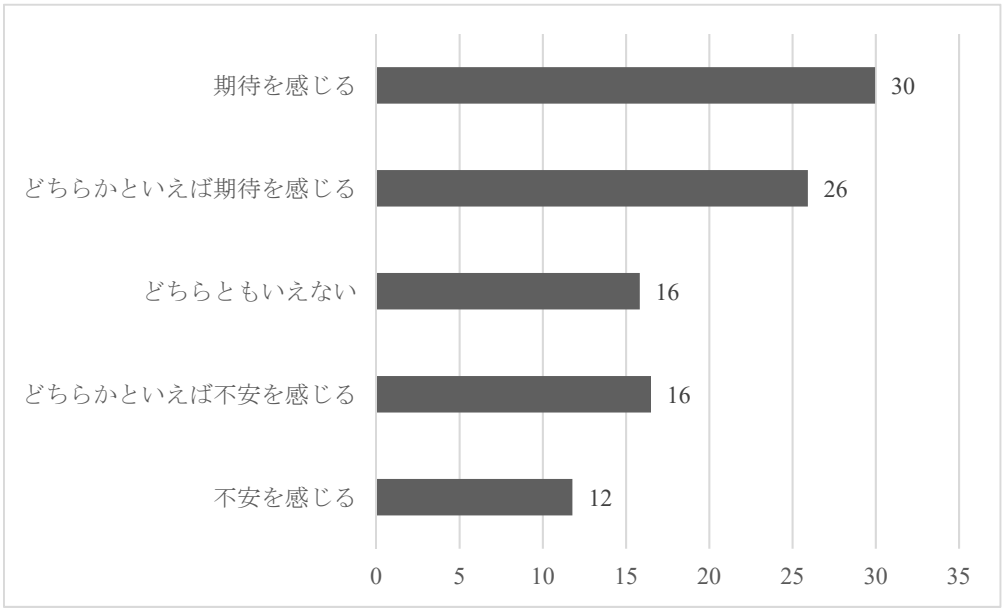
【図表 28】大学教育を通して社会に貢献できる人に成長できたか



【図表 29】大学生活での経験や身につけた知識・能力が、仕事や生活など今後の人生で役立つか

10. 卒業後の進路について

卒業後の進路に対する期待・不安についてたずねた。全体としてみれば期待を感じる学生が半数程度で、不安を感じるのは 3 割程度であり、一昨年度と同様の傾向がみられた。卒業して新しい進路に踏み出すにあたって、多くの学生は前向きにとらえていることがうかがえるが、不安を感じている学生も一定数は存在することから、こうした学生の不安の状況を調査し、適切に対応していく必要があるだろう。



【図表 30】卒業後の進路に対する期待や不安